『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』第五十一号　抜刷（二〇二五年一月）

【資料紹介】

当館所蔵　松本コレクションにみる三代井上良斎の特徴

小川咲良

【口絵】松本コレクション　井上良斎陶磁器資料より

図６　釉彩花瓶

図２　朧黄釉麦花瓶

図９　結晶釉耳付花瓶

図７　青磁中蕪花瓶

図４　笹画むし茶碗

図３　刻鹿紅葉飾皿

図８　青磁耳付香炉

図５　羽子板香合

図 11　伊賀意高杯

図 10　辰砂花弁形向付

【資料紹介】

当館所蔵 松本コレクションにみる三代井上良斎の特徴

小川咲良

【キーワード】
三代井上良斎　近現代陶磁器　神奈川焼

【要旨】
井上良斎は三代続いた陶工で、初代、二代は東京浅草にて輸出陶磁器制作で活躍し、三代は横浜へ出て「神奈川焼」と称する陶磁器を制作した。三代井上良斎の作品について、当館所蔵の松本コレクションから器種、文様、釉薬、器形の四点について整理しその特徴を検討する。

はじめに

三代井上良斎（一八八八－一九七一）（本名・井上良太郎、以下、三代良斎）は浅草で輸出陶磁器制作を行っていた陶工の三代目で、大正三年（一九一四）に横浜に窯を移し神奈川焼と称する陶磁器を制作した。戦後は工房制作から個人制作の活動を強め、日展を中心に活躍し、晩年には日本芸術院会員となった。

松本コレクションは、昭和二四年から二六年（一九四九－一九五一）まで神奈川県副知事をつとめた松本烈氏の旧蔵品で、三代良斎の花瓶や飲食器を中心とする四四件一四一点の陶磁器資料群である。当館では平成二年（一九九〇）に寄贈を受けた。

三代良斎の作品は、当館以外にも神奈川県庁や横浜美術館のほか、神奈川県外の複数の美術館に数点ずつ所蔵されている。当館では平成一四から一五年にコレクション展示「井上良斎の陶芸―松本コレクションから―」を開催しており、その後も作品展示や調査研究を続けている。しかしその後、三代良斎を中心とした展覧会や、作品を取り上げた論は少ない状況である。

横浜において素地から陶磁器制作を行った数少ない窯元であり、窯主・作家の両方で活躍した三代良斎は、横浜における近現代の陶芸界を牽引した存在であった。当館の松本コレクションは三代良斎のまとまった作品群であり、このコレクションの整理・検討を行うことで、作品の傾向の一側面を明らかにしていきたい。

一　井上良斎について

まず、ここでは初代から三代までの井上良斎の略歴について紹介し、三

代良斎の神奈川県内での活動についても触れる。

（1）浅草での初代、二代の輸出陶磁制作

初代井上良斎（一八二八－一八九九）は尾張国瀬戸（現・愛知県瀬戸市）に生まれ、瀬戸の名工である川本治兵衛（不詳－一八六五）の窯に従事して作陶を学び、幕末の頃に江戸へ出て御庭焼に従事した。その後、浅草の橋場町で開窯すると、瀬戸で産出する土を用いて、「隅田焼」と呼ばれる輸出陶磁器を制作した。これは壺や花瓶の表面に、人物や動植物を象った立体的な細工を施して焼成した、高浮彫装飾を特徴とする陶磁器であった。明治一〇年（一八七七）の第一回内国勧業博覧会では花紋賞牌を受賞し、当時の東京で活躍した職人を分野ごとに記録した『東京名工鑑』（東京都勧業課編、明治一二年）に掲載されるなど、明治期の東京での陶磁器生産における主要人物として知られる。

図１　永田の工房の様子

二代井上良斎（一八四五－一九〇五）は川本治兵衛の長男で初代良斎の養子に迎えられた。東京国立博物館所蔵の《釉下彩紫陽花香炉》にみられるような釉下彩の優品を制作し、同じく陶磁作品を出品していた初代宮川香山（一八四二－一九一六）や竹本隼太（一八四八－一八九二）らとともに国内外の博覧会で活躍した。明治三三年のパリ万博では金賞牌を受賞し渡仏、万博会場やセーヴル製陶所などを視察し学んだが、帰国後の明治三八年に病のため亡くなった。

（2）三代良斎の工房と個人制作

三代良斎は浅草で二代良斎の長男として生まれた。二代の没後、浅草の窯を継ぐと、田端で活動していた陶芸家の板谷波山（一八七二－一九六三）に師事した。大正三年には輸出に便利な横浜へと移り、はじめは高島町（現・横浜市西区高島）に窯を築いたが、関東大震災にて被災し、その翌年永田（現・横浜市南区永田東）に新たに登り窯を築いた。ここは登り窯に適した斜面と大岡川の水運の利があり、川を少し下った地点の南太田は、明治四年から宮川香山の眞葛窯がより大きな工房[1]を構えていた土地であった。

【図１】は永田の工房で、大正末期から昭和初期に撮影されたと考えられる写真である。この陶磁器制作の作業風景には、中央の三代良斎とみられる人物が匣鉢に焼成前の小皿を詰めているほか、右側には轆轤で碗を作る、壺や鳥形の香炉のようなものに細工をする、左側には粘土紐を作る、筆で絵付けする、といった九名の作業の様子が写っている。壁面と天井付近の棚には、乾燥中の作品や石膏型、見本品とみられる陶磁器が大量に並んでおり、当時の工房における制作の様子が窺える。

工房で窯主として輸出や国内向けの陶磁器制作を行う一方、三代良斎は作家としての制作も行った。板谷波山らを中心として、昭和二年に結成された関東の陶芸家団体である東陶会には、設立当初から参加し、同三年には第九回帝展に初入選、以降出品・受賞を重ねている。関東大震災と太平洋戦争下の空襲を経て、横浜からの陶磁器輸出が著しく減少した戦後には、作家としての活動をより強め、晩年にかけて個人の作風を洗練させていった。昭和二八年には日展審査員となり、同三三年に日本

芸術院賞を受賞。同四一年には日本芸術院会員に推挙され、日展理事に就任し、東陶会から分かれた新たな陶芸家団体である陶人社を結成し主宰した。

（3）神奈川における三代良斎の活動と足跡

三代良斎は近現代の陶芸界での活躍と功績から、昭和二八年の第一回横浜文化賞を受賞している。同四二年には現代工芸美術家協会の副会長（理事）に就任し、同四三年には神奈川県工芸会の会長に就任した。

同二六年には、横須賀のアメリカ海軍司令官マクマネス氏が三代良斎の永田の窯場を来訪したことや、三代良斎が基地内に出向いて作陶のデモンストレーションを行ったことが、親族に伝わる記録や写真[2]から確認されている。これは日本の作陶を通じた横須賀米海軍との交流があったという、重要な事実である。

三代良斎は亡くなるまでの半世紀近い期間、永田の工房で作陶を続けた。この永田の登り窯および工房跡は、現在でも保存されている。これは横浜市内に残る唯一の登り窯であり、令和五年（二〇二三）九月には横浜市の歴史的建造物に登録された。また、輸出品を一時保管していた横浜倉庫弁天橋出張所跡（現・横浜市中区本町）からは、関東大震災前の制作と考えられる「良斉」銘の隅田焼土瓶陶片が出土しており[3]、これらも横浜における輸出陶磁の歴史を示すものである。

以上のことから、三代良斎は大正から昭和にかけて横浜および神奈川県内の陶芸、工芸界を代表する存在であったと考えられる。

二　松本コレクションの特徴

次に松本コレクションについて、器種、文様、釉薬、器形の四項目に分けてその特徴を考える。コレクションの内訳は【表】に示し、資料名称、点数、法量と、箱書きその他の情報があれば備考欄に記載している。なお、半数以上の作品には共箱が残っており、箱書きから当初の作品名と組数がわかるものが多い。

（1）器種

はじめに器種別に件数をみると、花瓶一五件、向付五件、盃（盞）三件、鉢三件、湯呑茶碗三件、香合三件、瓶掛二件、小皿二件、香炉二件、高坏一件、酒器一式一件、徳利形重ね皿一件、珍味入一件、飾皿一件、むし茶碗一件の計四四件である。

まず飲食器類が二一件とコレクションの半数近くを占めている。盃や向付は五客から一〇客一組で作られたものが多いことが、共箱の残る作品からわかる。一部の湯呑茶碗には使用痕があり、実際に用いられていたようである。次いで花瓶が一五件と多く、一〇㎝程度の小型から三〇㎝程度の中型のものまでが含まれる。香炉、香合、瓶掛は二点ずつあり、飾皿は一点のみであった。

ここからは、組物を含む飲食器類、茶道具、飾皿や花瓶といった実用・鑑賞ともに幅広い器種の陶磁器を手掛けていたことがわかる。

（2）文様

次に文様をみると、植物や動物などを表した作は一八件であり、残りの二六件は線や釉のみの装飾、無文の作品であった。文様の種類を挙げると、植物では麦、唐花、柘榴、蓮弁、梅花、松葉、笹の葉、桔梗、動物では小鳥、鹿、竜、ほかに渦文や人物文などがあった。

例えば植物文では、《朧黄釉麦花瓶》【図2】は茶色の釉を掛けたのちに麦の文様を彫り、その後全体に黄釉を掛けている。文様化された麦の線は一本一本が固い線で彫り表され、静的な印象を受ける。麦文は昭和

一八年の第六回文展や、昭和二八年の第九回の日展出品作にも同様の文様がみられ、何度も好んで用いたようである。動物文では、《刻鹿紅葉飾皿》【図3】では掻き落としによって鹿文が表されている。鹿は簡略化された判のようなシルエットで表され、草原のようにも見える背景は、削った跡を粗く残して表している。

ほかに、絵付けによる文様が施された作をみると、《笹画むし茶碗》【図4】では笹の葉が緑釉の釉彩で小さく描かれ、《羽子板香合》【図5】では、焼き付けていない鮮やかな彩色で細かな人物が描き込まれている。

表されたモチーフは簡略化され、少ない線によって描かれたものがほとんどであった。これは三代良斎の作品の特徴の一つと考えられる。施文の方法については、彫りと絵付けの二種類に大別でき、ほかに線のみを用いた装飾もみられた。また、色絵は確認できず、一作品中の色数が少なく文様自体もない作が多いことから、器形自体や釉薬の色の魅力を活かすことを意図していると考えられる。

（3）釉薬

釉薬の種類では、緑釉、黒釉、青磁、白磁、鉄釉、瑠璃釉、辰砂釉、灰釉などがみられ、鉄釉と黄釉の組み合わせにみえるもの、また、朧黄釉や、名称は不明ながら紫色がかった茶色の釉、オレンジ色がかったグラデーションの釉など、独自に調合して用いたとみられる釉も確認できる。

このうち緑釉は、コレクション中で七件と最も多く用いられていた。緑釉といっても織部焼にみられるような光沢のある銅緑釉とは異なり、厚みや艶がなく素地のざらついた質感がそのまま残る。色調は明るいものから暗いものまで幅があり、《釉彩花瓶》【図6】ではそのグラデーションを活かして装飾している。同様の質感で言えば、《刻鹿紅葉飾皿》【図3】にもマットな暗い茶色の釉が用いられている。

青磁はコレクション中に四点含まれている。そのうち《青磁中蕪花瓶》【図7】は灰色がかった黄味の少ない発色で、高麗青磁を意識したものと思われ、《青磁耳付香炉》【図8】は明るい青緑色のいわゆる砧青磁の発色に近いものであるなど、釉と素地の使い分けがみられる。

結晶釉は三件あり、どれも異なる表情をみせる。《結晶釉耳付花瓶》【図9】は、黒釉で覆われた中に、耳の周辺と上部には釉の表面に白い結晶が浮かび、幻想的な景色を作り出している。結晶釉は微妙な色調を狙ったものが多く、一見すると華やかさは少ない。しかし、光にかざしたときの微妙な釉薬の色調の変化や輝きに、釉薬の研究を重ねて得られたであろう、技術の高さをみることができる。

釉の掛け方に注目すると、《辰砂花弁形向付》【図10】や《巻物珍味入》では流れを装飾的に用いている。また《伊賀意高坏》【図11】のように、茶道具の産地の作風を写した質感の、土や釉を用いる作もあった。

松本コレクションの作品からは、三代良斎が多くの種類の釉を使い分けていたことがわかる。加えて、緑釉や数種類の結晶釉にみられるような新たな色彩や質感の釉に挑戦しており、特に緑釉については複数の作品に共通してみられ、自身の作風として確立していたことが窺える。

（4）器形

まず、花や葉、文様の形そのものを象った器形の飲食器類では《辰砂花弁形向付》【図10】、《青磁桔梗香合》、《笹の葉向付》、《結び皿》《巻物珍味入》がある。これらは香合を除き、いずれも同形のものが複数点一組で伝わり、型などを用いて成形され、同種の作が多く作られたと考えられる。

花瓶については、中蕪【図7】や鶴首のように、南宋から元時代の青磁などにみられる伝統的な器形が多くみられるが、三代良斎が考案した

と考えられる器形も含まれる。特に注目できるのは《結晶釉耳付花瓶》【図9】で、左右に張り出した三角形の耳が特徴的である。球状の胴と三角の耳という立体図形の組み合わせが、なめらかな曲線を描きながら融合しており、無文の単色釉のため形がより強調されている。本作は昭和四〇年の第八回日展出品作の《麓雪花瓶》（当館寄託）と類似し、この頃に独自の器形を模索して作られた作品の一つであると考えられる。

ほかに、《青磁耳付香炉》【図8】は、基本は鼎形の香炉であるが、三本足ではなく高さのある高台が付き、そこに縦の穴が二本空けられ、器形に新しさが感じられる。また、《緑釉耳付花瓶》は下半分に緑釉の刷毛目が施された鶴首形の花瓶であるが、肩部の左右に小さな環状の耳が付けられていることにより、全体の形のアクセントになっている。

このように、型を用いて多く作られた作、伝統的な器形がコレクションには多くみられるが、伝統的な器形に少し変化を加えたもの、三代良斎が考案したと考えられる表現もみられた。

三　松本コレクション全体の傾向と三代良斎の特徴

確認した特徴をまとめると、器種については飲食器類を含む実用陶磁器、そして花瓶が多く、文様では彫り文と絵付けによる簡略化された文様あるいは無文のものが多かった。釉薬は、様々な種類を使い分けながらも、緑釉の使用が多くみられ、三代良斎が作りだして用いたと考えられる釉の使用もみられた。器形は、伝統を踏襲する形とともに、一部にそこから離れ、自身で考案した新しい形を作る意識がみられるものがあった。

このコレクションから考えられる三代良斎の陶磁器の特徴としては、飲食器、花瓶といった身の回りの陶磁器を手掛け、伝統的な釉や器形を再現しながらも、釉薬や器形の一部に、自身特有の作風と技法を確立させようとする姿勢が感じられる。装飾は釉や彫りを用いて控え目に施し、文様は簡略化したものを好んで用い、釉や色調、形そのものを生かす造形を主としていると考えられる。

おわりに

横浜における作陶の実体は、同じく横浜で作陶を行った宮川香山の眞葛焼をはじめとして、海外から里帰りした輸出陶磁器によって徐々に知られ、明らかになりつつあるが、まだその研究の途上である。

本稿では松本コレクションから、三代良斎の作品の特徴について検討を行うことができた。紹介できた作品は一部ではあるが、作風と傾向をいくつか挙げることができたと考える。これを手掛かりとして範囲を広げ、近現代の横浜、関東での陶芸史の全体像を明らかにしていくことで、三代良斎の位置づけを行えるよう今後も調査を進めていきたい。

註

（1）『神奈川縣ニ於ケル陶磁器及漆器業』（神奈川県内務部、大正五年、三頁）の年産額の記載には、宮川香山氏が一〇万円内外、井上良太郎氏は三万円以上とある。『横浜市史稿 産業編』（横浜市、昭和七年、六三〇頁）の従業員数の記載には、宮川香山製陶所は二三、井上良斎製陶所は九とある。

（2）井上眞理、川井興一『井上良斎伝 草創期の陶芸家 祖父への思い』令和五年、三九、四〇頁

（3）『明治・大正 ハマの街 新市庁舎建設地・洲干島遺跡』横浜市歴史博物館、令和二年、三九頁

表　松本コレクション 井上良斎陶磁器資料　一覧

No.	【図】	資料名称	点数	法量（㎝） [MD：口径、D：胴径、H：高、BD：底径、W：幅]	備考	資料番号
1	図6	釉彩花瓶	1	MD6.7、D22.4、H24.6、BD9.5	箱書：蓋表「釉彩花瓶（「日本芸術院会員」黒長方印）良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000730
2		鶴首花瓶	1	MD2.5、D8.0、H19.3、BD3.6	箱書：蓋表「鶴首花瓶」　蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000731
3		釉彩花瓶	1	MD7.2、D11.5、H21.2、BD6.0	箱書：蓋表「鶴首花瓶」　蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000732
4		釉彩花瓶	1	MD7.3、D11.0、H21.6、BD5.5	箱書：蓋表「釉彩花瓶 良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000733
5		鶴首飛翔花瓶	1	MD6.9、D13.5、H24.5、BD6.6	箱書：蓋表「鶴首飛翔花瓶 良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000734
6		千條文花瓶	1	MD5.3、D11.6、H20.0、BD7.2	箱書：蓋表「千條文花瓶」　蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000735
7		青磁花瓶	1	MD4.3、D18.6、H18.6、BD9.7	箱書：蓋表「青磁花瓶（「日本芸術院会員」黒長方印）良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000736
8		黒釉花瓶	1	MD10.5、D12.0、H22.6、BD6.9	箱不一致か。（箱書：蓋表「青磁方花瓶」　蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」）	CV0000737
9	図7	青磁中蕪花瓶	1	MD16.5、D18.6、H30.2、BD11.0	箱書：蓋表「青磁中蕪花瓶 良斎作（「良斎」朱文方印）」 箱側面「昭和十八年十一月十一日横濱市土木局庶務課一同」	CV0000738
10		結晶釉中蕪花瓶	1	MD12.0、D12.6、H23.1、BD7.5	箱書：蓋表「結晶釉中蕪花瓶」　蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000739
11	図2	朧黄釉麦花瓶	1	MD11.0、D27.0、H35.5、BD11.0	箱書:蓋表「朧黄釉麦花瓶」　蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000740
12	図9	結晶釉耳付花瓶	1	MD7.8、D21.5、H20.2、BD8.0	箱書:蓋表「結晶釉耳付花瓶（「日本芸術院会員」黒長方印）良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000741
13		緑釉耳付花瓶	1	MD3.2、D11.0、H23.4、BD5.0	箱書：蓋表「緑釉耳付花瓶 良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000742
14		千段文耳付花瓶	1	MD9.0、D10.9、H23.8、BD7.7	箱不一致か。 （箱書：蓋表「葆光磁耳付花鳥彫花瓶」蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」）	CV0000743
15		彫唐華文瓶掛	1	MD32.4、H22.1、BD22.5	箱書：蓋表「彫唐華文瓶掛 良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000744
16		天目結晶釉瓶掛	1	MD33.3、H21.2、BD28.5	箱書：蓋表「天目結晶釉瓶掛 良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000745
17		柘榴文盞	5	MD5.5、H3.6、BD2.7	箱書：蓋表「柘榴文盞 五客」　蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000746
18		糸目盞	5	MD5.6、H3.5、BD2.7	箱書：蓋表「糸目盞 五客」　蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000747
19	図11	伊賀意高杯	1	MD24.8、H9.5、BD10.2	箱書：蓋表「伊賀意高杯」　蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000748
20		刻花文洋盃	6	MD5.2、H6.0、BD3.0	箱書:蓋表「洋杯」　蓋裏「刻花文 良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000749
21		酒器一式	18	徳利[MD5.5、D6.6、H13.6、BD5.6] 猪口（彫蓮弁文）[MD3.6、H4.0、BD5.6] 猪口（渦文）[MD5.6、H3.3、BD2.5] 猪口（文字文）[MD5.6、H3.4、BD2.4] 猪口（花文）[MD5.7、H3.0、BD2.7] 猪口（割高台）[MD4.9、H3.5、BD2.7]	内訳：徳利×2 猪口（彫蓮弁文）×10 猪口（渦文）×2 猪口（文字文）×1 猪口（花文）×2 猪口（割高台）×1	CV0000750
22		徳利形重皿	6	MD3.7、D10.2、H16.5、BD5.7	一つの徳利が四段の重ね皿に分かれる。各々に徳利の栓付属。	CV0000751
23		梅花彫鉢	1	MD24.8、H9.2、BD10.0	箱書：蓋表「梅花彫鉢」　蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000752
24		鉢（大）	1	MD25.5、H9.6、BD12.4		CV0000753
25		鉢（中）	1	MD19.4、H7.2、BD9.7		CV0000754
26		巻物珍味入	10	MD10.0、D4.8、H3.0、BD3.8	箱書:蓋表「巻物珍味入 拾客」　蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000755
27	図10	辰砂花弁形向付	5	MD12.5、H7.0、BD4.8	箱書:蓋表「辰砂花弁形向付 五客」　蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000756
28	図3	刻鹿紅葉飾皿	1	MD33.9、H5.8、BD20.8	箱書：蓋表「飾皿」　蓋裏「刻鹿紅葉 良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000757
29		向付	6	MD17.8、H4.2、BD7.7		CV0000758
30		結び皿	5	MD19.0×12.0、H2.0		CV0000759
31		御本手湯呑茶碗	5	MD10.3、H5.0、BD3.9		CV0000760
32		御本手向付	5	MD10.7、D10.9、H3.9、BD5.3		CV0000761
33		御本手湯呑茶碗	5	MD10.4、H5.1、BD4.0		CV0000762
34		湯呑茶碗	3	MD10.4、H5.4、BD4.0		CV0000763
35		小皿	8	MD6.7、D7.1、H3.0、BD4.0		CV0000764
36	図4	笹画むし茶碗	6	身[MD9.2、D7.5、BD4.2] 蓋[MD5.2、D2.6、BD4.2]	蓋と身それぞれ箱あり。箱書：蓋表（身）「笹画むし茶碗 六客 良斎作（「良斎」朱文方印）」、蓋表（蓋）「笹画むし茶碗蓋 六客 良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000765
37		御本手向付	5	MD10.8、D11.0、H3.7、BD5.3	箱書：蓋表「御本手向付 五客」蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000766
38		笹の葉向付	5	MD17.0×9.4、H4.7、BD10.0×6.0	箱書：蓋表「笹之葉向付 五客」蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000767
39	図8	青磁耳付香炉	1	MD8.0、D8.3、H9.2、BD5.8	箱書:蓋表「青磁耳付香炉」蓋裏「良斎作（「良斎」朱文方印）」 木製火屋付属	CV0000768
40		宝珠香炉	1	MD6.2、D9.9、H7.0、BD4.5	箱書：蓋表「宝珠香炉 良斎作（「良斎」朱文方印）」　木製火屋付属	CV0000769
41		青磁桔梗香合	1	W5.3、H3.0	箱書：蓋表「青磁桔梗香合 良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000770
42		白磁竜香合	1	MD5.9、H3.0、BD3.0	箱書：蓋表「白磁竜香合」　蓋裏「良斎作（「井上良斎」朱文方印）」	CV0000771
43	図5	羽子板香合	1	身[W19.7×8.0、H1.8] 蓋[W16.7×6.2、H1.2]	箱書：蓋表「羽子板香合 良斎作（「良斎」朱文方印）」	CV0000772
44		花瓶	1	MD3.2、D7.8、H12.1、BD3.6		CV0000773